

『月刊公民館』執筆文：地域に開かれた公民館（文部科学大臣表彰 H30 優良公民館）

「住みたい八束・選ばれる八束」をめざして

持 続 可 能 な ま ち づ くり

島根県松江市八束公民館 館長 池田 均



中海に浮かぶ八束町（大根島・江島）

はじめに

八束町は、島根県東部に位置し、鳥取県境の中海に浮かぶ大根島^{だいこんしま}と江島^{えしま}の2島からなり、2005年3月に松江市と合併し現在に至っています。松江市街地や鳥取県境港市方面へは県道で繋がり、車での移動が可能な陸続きの島（町）です。（2019年9月末現在：人口3,962人）

八束公民館は、住民の要求を基本に、社会教育、生涯教育の充実に重点を置いて運営してきましたが、2010年度からの公設自主運営以降は、「まちづくり」の役割も担い活動しています。特に、地域の恵まれた資源や人材、行政と共に取り組む基盤整備などソフト・ハード両面から、また、本町の位置、地形の有利性を活かし、人口減少社会にあっても「持続可能なまちづくり」を目指しています。

今回の「優良公民館」表彰の主な理由に挙げられた、伝統芸能の普及・継承活動など3点の取り組みや、近年の「まちづくり」活動について紹介します。



1 「社会・生涯教育」と「公民館運営」の充実

1) 地域の伝統芸能「^{しまし かんぶし}島芝翫節」の普及・継承活動

「島芝翫節」は、江戸後期の文化・文政の頃、当時の江戸歌舞伎で名のあった中村芝翫、嵐璃寛、市川門之助、市川蝦十郎等の芸風を讃えて唄われたものが、江戸から地方に流れ、現在では全国で唯一、この大根島で唄と踊りが継承されています。当公民館では、この伝統文化が途絶えることがないように、1985年に「島芝翫節保存会」を設立しました。

当保存会は、継承活動の一環として、1998年から毎年地元小学校のクラブ活動で、小学生（4～6年生）に踊りを指導し、その成果を毎年秋の公民館文化祭で発表しています。こうした長年のクラブ活動を通して、子ども達がふるさとへの愛着と誇りを持つなど、青少年の健全育成にも役立っています。また、今まで口伝えでしかなかった三味線、太鼓、唄を譜面にし、体験会を開催するなど、地域の伝統芸能の普及・継承活動に努めています。



島芝翫節保存会 大根島ぼたん祭出演



八束学園生 文化祭出演

2) 図書コーナーが地域の新たな交流拠点に

2018年4月、八束町中央に八束複合施設（松江市八束公民館、松江市役所八束支所、中村元記念館）が開館しました。これまで本町には公設の図書館がなく、その開設が望まれていました。新しい公民館は、図書コーナー：愛称「小さな図書館ふらっと」を中心に据え、気軽に集えるようオープンスペースとしています。蔵書にあたっては、



図書コーナー：愛称「小さな図書館 ふらっと」

複合施設開設を見据え、開設2年前の2016年度から、公民館地元協力費を負担いただき、子供向け図書を中心に毎年200冊程度揃えています。

また特徴の一つに、開設日時を「月曜日から土曜日の9時から17時」とし、利用しやすい環境を整えました。土曜の休日には、お父さんとの親子連れなど、平日も含め多くの人々が気軽に集う、新たな交流の場となっています。

3) 高齢者、障がい者、交通弱者にやさしい公民館

新しい公民館の開設に併せ、高齢者や障がい者、また交通弱者も気軽に公民館が利用できるよう、地域内外を運行する「コミュニティバス」の運行経路や時刻を見直しました。以前は、町内の一部地区だけの運行でしたが、全地区を循環するようルートの変更や時刻の見直しを行うとともに、公民館で行われる会議等をバス到着時刻に合わせるなど、利便性の向上を図りました。館内も下足のままでの利用や、床面も段差を無くしフラットにするなど、高齢者や障がい者も利用しやすい公民館となりました。



コミュニティバス新ルート運行開始式



2 「持続可能なまちづくり」～人口減少社会への挑戦～

1) 豊富な地域資源・人材

本町は、牡丹と雲州人参の産地として全国的に知られ、年間を通して国内外から観光客が訪れます。島の土壌は、保水力、保肥力の高い黒ボク土で、根菜類の栽培に適し、大根、サツマイモなど代表的な野菜のほか、ハマボウフウやパクチー栽培など、新たな農産物の開発が進められています。一方、耕作放棄地や空き家も多くなっていますが、近年、農業法人化や高齢者等が作る野菜・食材を販売する「産直市」や「パン工房」。また、空き家を「民宿」や「ゲストハウス」に再活用して、外貨（地産外商）を稼ぐ動きも出ています。地域人材の面では、ボランティア団体が元気老人対策として始めた「お寺カフェ」が人気を博しています。



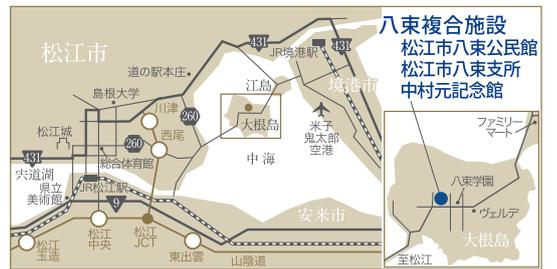
ボランティア団体による「お寺カフェ」（観音寺／波入）



大根島上空

2) 定住に有利な位置・地形

本町は、島根県東部の中海に浮かぶ2島からなり、中海圏域4市（松江市、安来市、鳥取県境港市、米子市）へは、40分以内で通勤が可能です。また、大きな山や河川もなく、近年全国各地で発生している豪雨災害等も想定されない、災害リスクの低い町です。



3) 「住みたい・選ばれる」環境への取り組み

松江市と合併して14年になりますが、2011年以降短期間で小・中学校や保育園の建設、複合施設等の整備が進みました。その理由は、

〈2を1に〉

- 2つの学校校舎「八東小学校」と「八東中学校」を、「八東学園（県下初の小中一貫校）」1つに。
- 2つの保育所「八東保育所（大根島）」と「双葉保育所（江島）」を、「やつか保育園（大根島）」1つに。

〈3を1に〉

- 3つの施設「八東公民館」「八東支所」「中村元記念館」を、「複合施設」として1つに整理。

〈4を3に〉

- コミュニティバス利用者の利便性向上のため「路線を延長」。一方、便数は「4便を3便に」減便。など整備条件を大きく見直しました。

今、地方の市町村は財政状況が大変厳しく、難しい行政運営にあります。そうした状況下では、痛みも伴う「スクラップ&ビルド」の考え方が必要です。あれもこれもはできません。町民の理解を得ながら地域から行政に提案しました。



八東複合施設竣工

4) 次世代層をターゲットに「田園回帰1%戦略」

私は、一般社団法人：持続可能な地域社会総合研究所が、2017年に提唱した、「田園回帰1%戦略」～地元の人（1%）と所得（1%）を取り戻す～の考え方に共感しています。

2015年の国勢調査によると、中山間地域では、全人口に占める団塊世代の割合が一番高いそうです。その団塊世代が元気で過ごす2027年までの10年間は、その地域にとって「持続可能な地域社会」となる最後のチャンスだそうです。具体的には、地域の「人口」と「所得」を、10年間毎年1%取り戻す取り組みができるか否か。達成できれば、団塊世代がリタイヤしても、緩やかな人口減少は続くものの、次世代が定住することによって、持続可能な地域社会となりうるそうです。



新緑の大塚山公園での「朝ヨガ」



夏休み世代間交流



インドとの経済交流の懸け橋「中村元記念館」



県下初の小中一貫校「八束学園」

3 令和の時代、「持続可能な八束町」の人口

本町の良さ・強みを生かし、今後10年間次世代層を中心に毎年40人（人口の1%）増加で、2027年＝人口3,796人を目指す。

算定

* 過去6年間の増加人数^(注1) = 182人（年30人：0.75%増）

* 過去6年間の減少人数^(注2) = 367人（年61人：1.53%減）

* 2027年（10年後）の人口目標数値

● 400人増（年40人×10年）－610人減（年61人×10年）＝210人減

● 4,006人（2017年）－210人（10年間）＝3,796人（2027年）

（注1）：増加人数は、出生者数＋転入者数－転出者数 （注2）：減少人数は、死亡者数